

「明治20年代」における「地理学」の位相研究序説

—内村鑑三『地人論』を梃子として—

佐藤 由美子

1. 本稿の目的

筆者は、昨年度この誌上で、今後の地理学研究の方向性を論じ、これまで地理学の領域で軽視されてきた言語分析の重要性を主張した。その結果、今後地理学が採り得べき一つの研究方向として、「地理」および「空間」を巡る「言説」の「記述 (description)」について示唆した (佐藤：1996)¹。

その際参考になるのは、地理学とは研究領域が異なるミシェル・フーコー (Foucault, M.) の視点であろう。フーコーは、ボルヘスの書物の中に引用された「シナのある百科事典」の中の、「動物」という分類項目に注目している。そこには、現在の我々ならば通常このように分類しない奇妙な分類項目14個が記されているのだ²。14の項目の内には、例えば、「飼いなされたもの」・「放し飼いの犬」、「人魚」・「お話に出てくるもの」などの項目がある。これは、今日では、他の項目と重複してしまうと感じるようなものである。あるいはまた、「この分類自体に含まれているもの」という分類項目も目を引く。この項目は、他の項目を全て含んでしまうように思われる。つまり、現代の百科事典の編纂においては決して考えられないような項目立てを、「シナ」の百科事典ではしているのだ。フーコーは、現在の我々から見て矛盾するようなものの見方が、「シナ」では成り立っていたことに驚きを覚え、そのような矛盾を矛盾とせず成立していた認識の基盤が、現在では崩壊してしまっているのではないかと考えた。そしてこのような、「時代」に「固有」な認識の基盤のことを、フーコーは「エピステーメ (épistémè)」と呼んだのである (フーコー：1993 訳, 13-23)。

フーコーの議論を地理学の「言説」研究において参考にすれば、次のようなことがいえるだろう。つまり、我々は通常、同じ言葉はいつ如何なる時代においても同じ意味を持つと考えている。ところが、同じ言葉であるにもかかわらず、現在の

我々の用法と異なる意味合いで使用されている場合があるということなのだ。例えば、「地理学」ということばについても、現在の我々が捉える地理学とは異なる認識基盤 (「エピステーメ」) において使用されたと感じられるような「地理学」の使用例があり得るのである。もしそうであるならば、これは今日の地理学、とりわけ歴史的並びに思想史的な地理学研究において、決定的に重要なことであろう。なぜなら、我々が歴史学的、思想史的研究を行う際には、自分たちの言葉の使用をそのまま該当する時代に適用することができなくなってしまうからである。つまり、現在と同じ言葉でありながら、その言葉が異なった「位相³」にあり得る可能性を考慮しなければならないのだ。更にいえば、現在と異なっているような言葉の使用方法を、「地理学」という学問が当時未発達であったというような推論に帰因させてしまってはならないのである。

従って、言説研究は、レヴィ＝ストロース (Lévi-Strauss, C.) が現代社会の論理に勝るとも劣らない無文字社会固有の論理を、「野生の思考 (la pensée sauvage)」として把握したように (レヴィ＝ストロース：1989 訳)、いわば“歴史的社会”における「野生の思考」を検討することから始まるといえよう。

実は、今回検討する予定の内村鑑三『地人論』において、まさしく現在の我々が使用する“地理学”とは異なると感じさせるような表現が存在していた。それは「地理学」と「文学」との関係にかかわる問題である。この点については、次節以降で詳しく検討することになろう。

ところで「文学」については、内村の『地人論』が執筆された、「明治20年代」の「文学」の位相を念頭に置いた研究が既に存在している。その画期的な研究は、柄谷行人のものである。そこで本稿では、内村鑑三の『地人論』、およびそこに記された「地理学」が一体どのような位相を持つのかを、柄谷の研究を参照しつつ、「文学」との関わりにおいて検討してみることにしたい⁴。

「明治20年代」は、「日本」にとって独特の問題をはらんでいる時代であった。それは、柄谷行人が『日本近代文学の起源』で指摘したように、「風景の発見」という「認識論的転倒」の生じた当の時代であったのだ（柄谷：1988）。本稿は、「明治20年代」における「地理学」の位相研究の方向性を模索するための覚え書きである。

2. 『地人論』における「地理学」と「文学」

内村鑑三の『地人論』は、もともと明治27（1894）年4月に『地理学考』の書名で刊行されたものである（内村：1980, 352）。そして、日清戦争以後の明治29（1896）年11月に、「アーノルド・ギョー」(Arnold Guyot)の著作“The Earth and Man”の名を借りて『地人論』と改題する旨の序が書かれ、明治30（1897）年2月に再版が刊行された（内村：1980, 480）。

この書物に対する当時の地理学界における評価は、それほど高いものではなかった。石田龍次郎によれば、この書物は「まことに多く読まれたるにかかわらず地理の専門家によってはほとんどとりあげられず、その思想の後継者もあらわれず、名だけ語られているもの」だという（石田：1984, 290）⁵。

ところで、本稿で中心となる問題は、当時の地理学界に於ける評価が芳しくなかったにもかかわらず、今日において地理学の再生が説かれる際に引用される、内村の次のような言説の中に潜んでいる。

地理学は実に諸学の基なり、我等地の事を知らざるにいかで天の事を悟るを得んや、吾人の智識は地を以て始む、（中略）地を以て始め天を以て終る、殖産、政治、美術、文学、宗教は此絶頂絶下両極端に互る人生の段階なり、地を究めずしてこの階梯を昇らんとするものは夢に雲井に上るが如く、発点なき故に着点に達するを得ざる人なり。（内村：1980, 357）

内村の論理によれば、「地理学」を学ぶことによって人間は「殖産、政治」という形而下的な事

柄から、次第に「美術、文学、宗教」という形而上的な諸問題へと考究を進めていくのだ、ということになる。独特のキリスト教的な世界観の中で、「地理学」を位置付けようとした内村の立場からして、このような形而下的な事柄から形而上学へ、という階層化が、何らかの意味を有していたという点はあるであろう。事実、この書物は、明治26（1893）年から明治27年に既に刊行された一連の著作（『キリスト信徒のなぐさめ』『記念論文 コロンブス功績』『求安録』『貞操美談 ルツ記』『伝道の精神』『地理学考』『日本および日本人』）の中の一書なのである。

例えば、『求安録』の中には、人間はそもそも「罪を犯すべからざるものにして罪を犯すもの」であり、「清浄たるべき義務と力とを有しながら清浄ならざるもの」である。つまり、「彼は天使となり得るの資格を供へながら屢々禽獣と迄下落するものなり、登りては天上の人となり得べく、降つては地極の餓鬼たる」という。それ故、そのような性行を有する人間は「無限の栄光」と「無限の墮落」の両極端の中間地点に存在しているというのであった。内村は述べる、人間は「彼の棲息する地球と同じく絶頂Zemith 絶下Nadir両極点の中間に存在するものなり」と。（内村：1980, 137）

このように、「絶下」と「絶頂」の中間点に位置する人間が、形而下的な問題および形而上学的な事柄を探究するという枠組みの中に『地人論』が位置していたことは、ここからも見て取れる。従って、『地人論』の構造それ自体を論じようとするならば、内村の思想全体の文脈の中での『地人論』の検討が必須であることはいうまでもない。

が、本稿で論じようとするものは、今日の我々の常識から考えて、一見すると奇妙に思われるその中身について、なのである。つまり、地理学が「殖産、政治」の「基」という主張ならば今日においても容易に理解可能な言説であるが、「美術、文学、宗教」までもが地理学を基礎とせざるを得ないという主張の奇怪さである。

実はこれは内村鑑三のみにいえる事柄ではない。『地人論』を遡ること23年、福澤諭吉によって著述された『世界国尽』の中にも、次のような一文が存在する。福澤は、「地理学」を「天文の地学」「自然の地学」「人間の地学」に分けた上で、

「人間の地学」で取り扱うべき中身に、「人種言語の品類、風俗政体の異同、文学技芸の巧拙、文明開化の前後等」を挙げているのであった（福澤：1959, 655）。この点、内村が「地理学」を「地質学」「天文学」に対比させて論じているのと同様である。

福澤がミッチェル（Mitchell）等の、内村がギヨー、リッター（Ritter, C.）等の書物をそれぞれ参照しているということ、すなわち両者の著述が外国の書物の影響下にあるという事が、ここではさしあたり問題でない⁶。なぜなら、一方的な影響ということはあり得ないからである。影響とは、受け入れ側にそれを受け入れる基盤、すなわち受け入れ側に存在している解釈コードを前提とした上で成立するものだからだ⁷。そういった意味からすれば、影響というよりもむしろ、「摂取」や「共鳴」といった方が適切ではなかろうか。

とすれば、なに故彼らが「美術、文学」の「基」として「地理学」を位置付けなければならないと考えたのか、言い換えるならば、位置付けても不思議ではないと見なしたのか、ということが問題とならざるを得まい。

一般的な解釈としては、自然環境が人間の歴史や運命を支配するという「自然環境決定論」的な考え方が普遍的だからだ、という見方が推定され得る。実際、内村は、次のように言及している。「地理の美術文学」との関係は、「慈母の其子に於けるの関係」のようなものであるという。つまり、「詩人ゲーテ」が述べるように、「英国の詩歌に絶望の思想」が多いのは、「其の地理学上並に気象学上の理由に」ある、というのだ。すなわち自然環境が「文学」⁸に影響を与えているというわけである。

このような内村の認識の一端は、彼が『地人論』を執筆する際に使用したと思われる抜き書き帳の中の記述に伺われる。例えば、内村はヘーゲル（Hegel, K.）の『歴史哲学』第二篇の「世界史の地理的基礎」の次の箇所を引用している⁹。

自然の評価はあまり高すぎても、またあまり低すぎてもいけない。温和なイオニアの空はホメロスの詩の典雅に寄与するところが多かったにはちがいない。けれども、この空だけがホメロスを生むというわけのものではな

い。事実、その後必ずしもこれを生まなかったのである。トルコの支配下にはどんな詩人も出なかった。（ヘーゲル：1968訳, 125）

このような記述からわかるように、ヘーゲルはここで単純な「自然環境決定論」を述べているのではない。「精神が己れを展開する」際の「特殊な可能性と」して「自然の相違」があり、その際の基礎として「地理」が位置付けられているのである（和辻：1962, 224-233）。

だが、ここで注目したいのは、ヘーゲルが挙げている文学の形式が韻文だという点であり、内村が『地人論』の中で述べている文学の形式もほとんどが韻文というジャンルに属しているという事なのだ¹⁰。

ところで、正宗白鳥は、1949年に「内村鑑三」という文章の中で、「徳富蘇峰の文学観、内村鑑三の文学観は、当時の純文学者の文学観とは異つてい」と述べている（正宗：1969, 354）。ここで正宗白鳥が述べている「純文学」とは、「自然主義」的文学のことであろうから、彼は「自然主義」の立場から見て、蘇峰と内村の文学観が異質であるということを描き出していると考えられる。

では、蘇峰や内村の文学観は「ロマン主義」であったのであろうか。そうとばかりもいきれない。徳富蘇峰は、明治27年に刊行された『文学断片』の中で、次のように述べている。「文学者とは如何。詩人なり、院本作者なり、滑稽者なり、諷刺家なり、小説家なり、説教者なり、人の性質品行を書く記者なり、訓言を書く人なり、政治上の演説者なり、苟も彼等か…人類と人情とに説き及んで、吾人に教ゆる所のものは、皆な是れ文学にして。之を教ゆる所の人は、皆な文学の世界にある人なり、即ち文学者なり」と（徳富：1894, 77）。つまり、蘇峰が「文学」の範疇として取り上げているものは、今日の通念から見て、通常の「文学」と呼ばれているものとは、かなり異質なものが含まれているのである。とりわけ、我々が通常「文学」と対立させて考えているような「政治」まで、含めてしまっている¹¹。

実は内村鑑三の文学観にも、蘇峰のものと似ている部分があるのだ。彼は明治27年7月に行った「後世への最大遺物」という講演の中で、文学について次のように述べている。

即ち我々の思想を遺すには今の青年に我々の志を継いで往くのも一つの方法でございますけれ共、併ながら思想其物丈けを遺して往くには文学に依る外無い。(中略) 文学といふものは我々の心に兼々抱いて居るところのものを後世に伝へる道具に相違ない。夫が文学の実用だと思ひます (内村：1981, 268)。

このように内村は、「文学」を「われわれの心のありのまま」の「思想」を伝える「道具」であり、そこに「文学」の「実用」性があるのだとする。そして、「思想を遺す」という実用性を持たぬ『源氏物語』は、「文学」ではないと非難し、頼山陽を称揚するのであった (内村：1981, 268-272)。

これは通常のわれわれが持つ「文学」のイメージと異なるものである。われわれは、「文学」は「実用」とは無縁なものと感じており、まさしく『源氏物語』を「日本」の「文学」の傑作の一つと信じているのだ。そして、この内村の、後世に「思想を遺す」ための「文学」という考え方は、まさしく、正宗白鳥が感じたように、蘇峰の文学観、つまり詩人や小説家や政治家などを含み、「人類と人情とに説き及んで、吾人に教ゆる所のものは、皆な是れ文学」であるとする考え方に通ずるといえよう。

同様のことを坂本多加雄は、主として山路愛山と北村透谷の文学論争を検討しながら、次のように指摘する。つまり、愛山がいうところの「文学」は、「今日の詩歌や小説を指すものというよりは、より広く、歴史、哲学、経済論、政治論を包摂するものであり、自然科学を意味する『理学』に対して、文化系学問全般を指すような意味での『文学』だった」、と。一方、透谷は、「近代的な意味での『文学』、すなわち、今日われわれが言うような意味での『文学』という概念が形成される」のに、大きく貢献した人物だったのである (坂本：1996, 34-35)。

これまでの検討からいえることは、内村の使用する「文学」ということばが、今日「自然主義」や「ロマン主義」という概念を伴って、我々が用いている文学と、その範疇や意味が異なっているということなのである。これはすなわち、我々がある「テキスト」を読む際には、現在の我々の見

方をごく当然なものとして当てはめるのではなく、できるだけ我々の文脈を排除し、当該の時代の文脈の中において考えなければならないということなのだ。従って内村の『地人論』で使用される「地理学」及び「地理」の位相は、その時代の文脈の内では語られなければならない。

ところで、このような蘇峰や愛山の文学観は、伝統的文学観に近いことが指摘されている (坂本：1996, 34)。とするならば、明治27年という同時期の『地人論』と「後世への最大遺物」という題の講演に登場する、内村の使う「文学」ということばも、同様な意味で伝統的なものを含んでいたと考えられる。しかしながら、内村が『地人論』の中で名を挙げる「文学」者は、外国の、主にイギリスの詩人であった。

一見矛盾しているかのように見えるこれらのことは、実は「日本」に西欧の諸観念が接続されたために起こる新たな事態をあらわすものであった。これについて、柄谷行人の「風景の発見」を手がかりにしながら、次節以降で検討したいと思う。「風景の発見」を念頭に置かずして、内村の「地理学」の位相は明らかにならないのである。

3. 風景の発見

これまで、内村鑑三の『地人論』にあらわれる「地理学」の位相を、主に「文学」の側から検討することによって、明らかにしようと努めてきた。が、ここで更に検討しておかねばならない問題が残されている。それは、柄谷行人が『日本近代文学の起源』の中で述べた「風景の発見」という「事態」についてである (柄谷：1988)。柄谷は、「風景」がまさしく「明治20年代」に見出されたことを述べており、内村の言説の位相を検討する際に、無視し得ない問題提起をしている。よってここからは、これについて検討することにしたい。

この書物は、柄谷の慎重を期した表現故に、多かれ少なかれ誤解を招いてきたように思われる。その誤解とはまさしく「風景の発見」という表現に起因する。最初にこの表現をめぐる誤解について、検討してみようと思う。

通常、「風景」として我々が想起するのは、美術の時間に「写生」したような、自分の身のまわりにある木々や草花、電車の窓から見える遠くの

山々などである。が、「風景」と我々が通常呼ぶような、こうした「風景」(=「風景としての風景」)は、実は、「近代」という時代の中で見出されたものだといえる。

例えば柳田国男は、「雪国の春」(大正14年：1925年)の中で、「江戸のあらゆる芸術がつひ近い頃まで」、国の中心に住む者ばかりか、「国の中心から少しでも遠ざかつて、山奥や海端に住つて住まうとする者」までもが、「型」という「古文辞の約束を甘受して居たこと」を述べている。

維新以後、このような状況は、日本に「西欧羅巴の諸国の」思想、つまり「人の考を自由にする」という目的を持つ「西欧羅巴の諸国の古典研究」などが入って来たことで転換されるはずであった。が、日本にあっては、依然として「之に反して、再び」型に「捕はれに行」こうという傾向が続いていると彼は見なしていた。このような状況を打開するものこそ、「自由なる精気」であった(柳田：1968a, 6-8)。

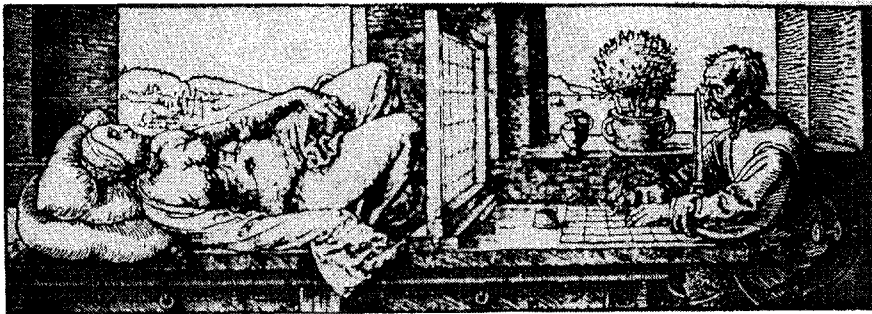
そもそも、従来の「日本で名勝といふものは、実は最初すぐれた先輩がきめたものであつて」、「多数」の人々は「教へ導かれて」名勝を知るようになったのであり、その中で「最も強く、以前我々の自由な感動を拘束して居たのが」、「近世の風景画であつた」のだ。

一方、「日本の山水画といふもの」は、本来「支那」という「外国から学んだ趣味」であつた。したがって「俗人にはわからぬ一つの型」を持っていたのである。にもかかわらず、日本人は、これを一つの「尺度」として、「自国の風土」を判定する基準にしていた、と柳田はいう。

それ故我々は、「近世の風景画」や「山水画」などを標準として、「是がいゝ景色なのだよと教へられると、さうですかと謂つて感心する気味があつた」のだった。この傾向に対し、柳田は「自由なる精気」を発揮して、「自分はこつちの方が好いと思う」というように「各人の鑑賞を自由に」しなければならない、と主張する。そうすれば、「以前の名所図絵などゝいふ本には」全く載せられていなかった「地域から、幾つとも無い新風景が発見せられ」るのだ、と(「旅人の為に」(昭和9年：1934年)、柳田：1968b, 420-424)。

柳田のいう「新風景」を我々に「発見」させるものこそ、西欧「近代絵画」に用いられた線遠近法¹²に基づく視線なのだ。

線遠近法とは、一般的にいえば、「静止した」ただ一点の固定化された視点から、「目的とする物体」を平面上に「正しく投影する」方法のことである(図1参照)。図1を見てもわかるように、画家の視点を固定し、モデルと画家との間に方眼を入れたスクリーンを立て、その点や線をスクリーンと同じ方眼を入れた画用紙の上に対応させて写し取るという徹底した方法を採用していた(橋爪：1989, 160)。言い換えれば、「人間の目と描写対象との位置の関係を、客観的に認識」するものといえる(若桑：1995, 152.; 小山：1995, 146-147)。それは、「遠いものは小さく見え、近いものは大きく見えるという視覚の生理的現象を、自然科学の原理を適用して理論化した技術」であり、我々に、二次元の平面上に描かれた対象が、三次元の立体的空間の中にあるような錯覚をもたらすのである(神吉：1995, 274)。



<図1>デューラー「横たわる裸婦を描く製図工」
(小山：1995, 117. より転載)

ところで、線遠近法が一般化されるにあたっては、世界観の転換が必要であった。大森莊蔵は、「近代科学以前の世界観から近代的世界観への転換」を、絵画的の比喻を用いて、「略画的な世界観の密画化」ととらえている。大森によれば、「近代科学以前の世界観」をあらわす「略画とは世界を時間空間的におおよそ描写して細部に留意しない（中略）世界像のことであり、近代的世界観をあらわす「密画化」とは「略画的世界観」が「漸次精密化されていくこと」である（大森：1994, 17）。そして、大森のいう「略画的な世界観の密

画化」が引き起こされたのは、デカルト（Descartes, R.）の「延長」の概念が一因であったと考えられる。

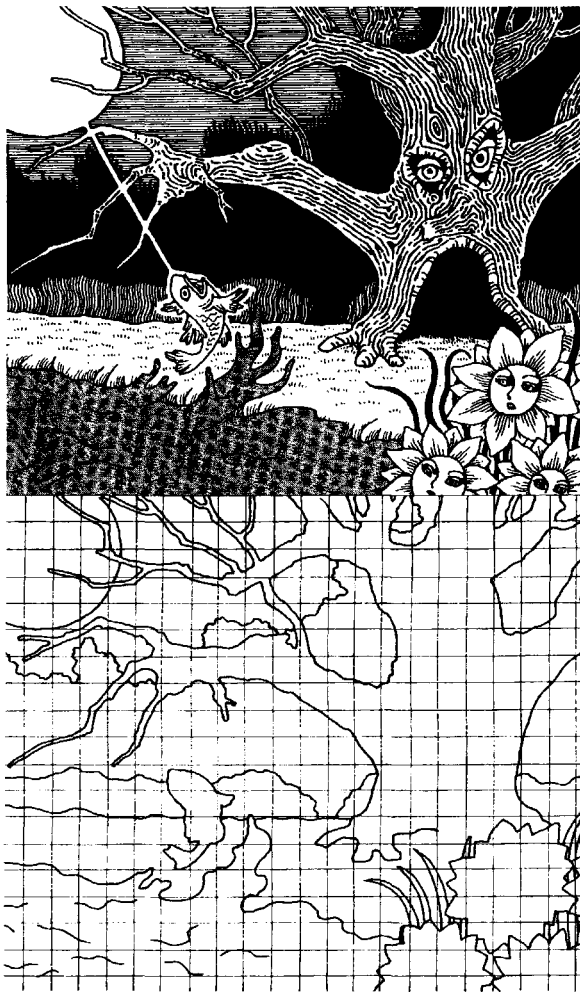
デカルトはまず、「事物」を「精神」と「物体」に分類する。つまり、前者は「知的もしくは思惟的事物の類」であり、後者は「物質的事物」、すなわち「長さ」と幅と深さを持つ「延長の実体」であるという（デカルト：1967訳, 67）

さらにデカルトは、代数学と幾何学を結合させるための画期的な方法を提起した。それは座標軸である。「平面の各点を、x座標、y座標の組合わせで示」すことによって、物体の運動を数式で表現できるようにしたのである。地上の物体ならば放物線、天体の運動ならば楕円、という具合に方程式によって表せるのである。結果として、天界と地上とが別々の秩序に属すると考えられていた中世の世界像が融解し、「近代的」世界像の誕生に寄与したのだ（橋爪：1989, 138-141）。

すなわち、このようなデカルト的世界観と異なる「近代以前の世界観」＝「略画的世界観」にあっては、人間と神の住まう場所は自ずから異なる意味を持つ場所であり、そこに存在するものは当然異なる意味を持っていた（図2上参照）。が、デカルトは、物体の属性を「延長」と考え、それを座標軸で表すという画期的な方法によって、あらゆる場所を等しいもの、つまり個々別々の意味があるわけではない、神の意志とは無縁なものにとらえたのである。つまり、デカルトによって、「均質な空間」（図2下参照）という把握の仕方が生み出されたのだといえよう（小阪：1990, 142-146）。

大森のいう「密画化」という事態の成立である。デカルトの「精神」（＝見る「主体」）と「物体」（＝「見られるもの」）、それに伴う主観客観という図式、及び描く対象を正確に方眼のマス目に対応させながら描くということによって示されるような「等質的あるいは均質的な空間」（中村雄二郎：1995, 86）。これこそが、線遠近法を表出させたのであった。

こうした事態を、フッサール（Husserl, E.）は次のように説明する。まず「近代初頭に」、 「デカルト以後」の「新たな理念」によって、「学の改造」が始まる。その「改造」とは、「さしあたっては古代の遺産であるユークリッド幾何学および



＜図2＞略画の世界（上）と密画の世界（下）
（小阪：1990, 147. より転載）

それ以外のギリシア数学、さらにつづいてはギリシアの自然科学など顕著な個別科学の改造という形で」行われた。それは、「数学に普遍的な」「しかも古代人の知らなかった原理的に新たな様式の課題が課せられ」て、「強力な意味の変更が行われ」たといえる（フッサール：1995訳、45）。

具体的には、「数学は、物体世界」の「空間時間的な形態」を「理念化」することによって、「理念的な客観性を創造した」のであった。言い換えるならば、「数学は、経験的直感的な多様な形態」、すなわち我々が生活している「空間と時間という生活世界の漠然とした一般的な形式から、ことばの本来の意味での客観的な世界をはじめてつくり出すに到った。但し、数学の「理念的」な世界を、我々に「経験的に直感される世界へ」結合させる必要があった。それを可能にしたものこそ、「測定術」である（フッサール：1995訳、63）。

フッサール曰く、「測定術」とは、「土地の測量術」のような「実用的な客観化の機能」もさることながら、「経験的な」面も持つ。すなわち、まず「川や山や建物など」の「形」，「次にはその大きさや大きさの関係」，更に「距離や角度を測ることによって行われる位置の規定」などに、「その概念を与える」ようなもののなのである。このような測定術の機能は、「実用的な関心を純粹に理論的関心に転化させることによって理念化され、純粹幾何学」へと移っていく（フッサール：1995訳、56-57）。

このように、デカルトの「延長」・「座標軸」を契機として、これと密接に関連する「線遠近法」等々が、重層的な織物となって「略画的世界の密画化」を促進してきたのである¹³。

そして、現在の我々は、まさしく「密画」的世界、いうなれば遠近法的な視界の中に慣れ親しんで生活しているのだといえよう。そして線遠近法によって写しとられる画像こそ、個物の「現実」的（リアル）な存在の有様であると認識しているのである。

このように説明してきてわかることは、「近代」以前には、例えば山水画のような、あるイメージがあってそれを通じて風景を描いていたのに対して、「近代」以降は実際の目に見える風景を、まさに「リアリスティック」に描いているの

だ、ということなのである。我々は「近代」において、これまでの枠組みを離れて初めて風景を掴み得たといえる。

ところが、このように論じてきたにもかかわらず、筆者には、柄谷のいう「風景の発見」が、通常いわれている線遠近法的視線がもたらすリアルな景觀の「発見」というような、単純なものではないように思われる。柄谷行人は、美術史上の線遠近法的視角によるリアルな近代的風景の発見が、「近代文学」の言説上に、「リアリズム」の成立として見られると主張しているのではない。次節で詳述しよう。

4. 柄谷行人の「風景の発見」

まず、注意しなければならないのは、柄谷が、括弧付きの「風景」と括弧なしの風景とを、ある程度書き分けているという点である。括弧の付かない風景は、我々が通常考えているような、遠近法的視覚からもたらされる風景のことであると一応捉え得る。ところが、括弧を付した「風景」は、風景と同義でない。

柄谷が意図する「風景」とは、おそらく、我々が何かを認識する場合、意識することもなく言及し尽くすこともできないが、明らかに依拠しており、我々の認識を支えているような「場」（＝「認識の布置」，すなわち「エピステーメー」）のことなのである。「風景の発見」とは、そのような我々の「認識の布置」がそれ以前のものから完全に変化（＝「転倒」）してしまうと、以前の「認識の布置」でものをみることができなくなる、というような認識論的転倒の「事態」そのものを指す。柄谷は次のように述べる。

（前略）私がいいたいのは、（中略）「風景」以前の風景について語るとき、すでに「風景」によってみているという背理である。たとえば、山水画とはなにかと問うとき、その問いがすでに転倒の上にあることを自覚していなければならない。（柄谷：1988、22）

実は先程述べた、明治以前から描かれていた山水画は、明治期にフェノロサによって「山水画」と命名され、絵画表現のカテゴリーの中に位置付け

られるようになったものなのである。つまり「山水画」は、風景画との対比によって出現したものであり、「山水画」を一つの対象としてみることで、もう既に「風景の発見」という「認識論的転倒」の上でみていることに他ならないのだといえよう。我々は、「山水画」をみる瞬間からもうすでに「認識論的転倒」の枠組みの中にはまりこんでしまっており、その中から決して抜け出せない。つまり、「風景の発見」以前に、山水画がどのようなものとして認識されていたのかについて、我々は知ることができないということなのだ。

「西欧」では、18世紀から19世紀にかけて遠近法的転倒が起こったが、それは「中世絵画」から時間をかけて誕生してきたものであった。しかしながら、日本ではこの西欧の遠近法的転倒を輸入し、それを「日本」的文脈で置き換えるという、幾重もの転倒が生じたのである。それを柄谷は、「すでにわれわれは「ごく自明なもの」、「客観的」なもの」として捉えているが、実は「それ自体が一つの特定の配置によるということ」に気づいていない、と主張する（柄谷：1988, 202-207）。そして、このような「認識論的転倒」の「配置」を「風景の発見」と呼ぶのである。

さて、「風景の発見」と呼ぶようなこうした認識論的転倒は、絵画の上にだけ生じたのではない。それはまた、日本文学史の記述の中に徴候として表れていると、柄谷は考えている。その一つのあらわれは、「ロマン主義」から「自然主義」への移行という日本文学史の通説に関するものである。彼はまず、「日本」の「近代文学」の言説において、「ロマン主義」から「自然主義」への移行という語られかたの中で感じた違和感について記す。柄谷が感じた違和感は、通説のいったいどこにあったのだろうか。まず、通説を概観することにしてしよう。

中村光夫によれば、「自然主義の思想」とは、「個人の権威を否定し、自我の尊厳を抹殺する自然科学の方法」を「文学創作」へ「適用」というものであった。「自然主義の思想がわが国にはじめて紹介されたのは」、「明治二十二年に森鷗外がゾラを論じた『医学の説より出でたる小説論』にまで遡り得るという（中村光夫：1991, 115）。鷗外が日本に紹介したゾラの小説論は、「医学」というまさに「自然科学の方法」を基に

していたのであった（臼井：1979, 86）。そして、この「自然科学の方法」が、前述したデカルトの「延長」の概念から派生していることはいうまでもない。

一方、「ロマン主義」はこのような、自然科学的な「精神に対する反動として」、生まれてきたとされている¹⁴。「ロマン主義」の第一の課題は、「人生と世界との分立と対立にもかかわらず、それを通して全体を統一的に見ることであった。言い換えれば、従来の知識に満足せずして、「直ちに絶対的真理」すなわち「生命の根元に触れようと欲する」精神であったといえよう（南原：1985, 299）。

ところで、日本における「ロマン主義」的文学の広がり、島崎藤村・北村透谷ら、『文学界』に集った人々によって成されていた。明治26年から31年までの期間に刊行されたこの雑誌には、「透谷の評論、一葉の小説、藤村の詩」が掲載されていたが、そこで中心となっていたヨーロッパの文学の形式は、韻文であった。「ゲーテ、シラー、エマスン、バイロン、シェリー、ワーズワス、キーツ、ロセッティー、ダンテ」などをめぐる「ロマン主義」的美学が論ぜられていたのであった（長谷川泉：1961, 37）。

ところが、西欧では通常「ロマン主義」と「自然主義」を対立するものと捉える傾向が強いのに対し、興味深いことに、「わが国の自然主義文学者」は、「作家たると理論家たるとを問わず」、「決して自然主義ではなく、浪漫主義の内容を自然主義の手法ですくいあげようという、奇怪な努力と模索」を繰り返してきたというのだ。つまり、臼井吉見によれば、「日本」においては、「自我を生かそうとする浪漫主義の内容と、自我を否定しようとする自然主義の手法との奇怪な結合」がなされたというのである（臼井：1979, 87-88）。同様のことを中村もこう記す、「我国の自然主義文学はロマンチックな性格を持ち、外国文学ではロマン派の果たした役割が、自然主義者によって成就された」と（中村光夫：1985, 201）。

このような語られかたの中では、例えば国木田独歩のような作家の文学史的位置付けについて、「浪漫的な自然主義」（長谷川泉：1961, 48）と言わざるを得ないことになってしまう。果たして独歩は「ロマン主義」者なのか「自然主義」者なのか、

このような文脈の中では明確な形での分類を行うことができないのである。そして、独歩に表れた「浪漫的自然主義」的性格によって生じているものこそ、「日本近代文学」の矛盾であるとする。このような矛盾は「日本」の「近代文学」の歪みであり、「日本」の「文学」の未成熟に起因すると考えるのであった¹⁵。

しかしながら、柄谷は、「日本近代文学」が歪んでいるという従来の見解、すなわち「ロマン主義」対「自然主義」という対立図式的見方そのものが、「風景の発見」という「事態」を通じて出てきたものと捉えている。少々長くなるが、彼のことばを引用しよう。

リアリズムとロマン主義はいずれもある事態から派生したのであり、そのかぎりでは「文学史」的な概念ではありえない。たとえば、ハロルド・ブルームは、われわれはロマン派のなかにあり、それを否定することそのものがロマン派的なものだといっている。T・S・エリオットも、サルトルも、レヴィ＝ストロースもまたロマン派に属するのである。反ロマン派的なものがロマン派の一部にはかならないことをみるには、ワーズワースの『プレリュード』や、哲学においてそれに相当するヘーゲルの『精神現象学』をみればよい。そこには、すでにロマン派的な主観的精神から客観的精神への「意識の経験」、あるいは「成熟」が書かれている。つまり、われわれは、反ロマン派的であること自体がロマン派的であるような「ロマン派のディレンマ」に依然として属している。(中略)この困難がいかなるものかをみるためには、むしろ狭義のロマン主義・リアリズムといった概念から離れなければならない。(柄谷：1988, 38-39)

柄谷は、「反ロマン派」＝「リアリズム」は、「ロマン派」の裏返しにすぎないというのだ。なぜなら、「リアリズム」も「ロマン派」も双方ともに、ある「事態」から生じたものであるからだ。そして、「リアリズム」対「ロマン派」という「概念」図式に捕らわれていたのでは、その「事態」が見えない、と警告する。

柄谷が指摘しているのは一体何か。柄谷は、このような状態が生み出されているのは、我々の「認識論的布置」が「転倒」しているからだと考える。この「認識論的布置の転倒」という「事態」そのものを、柄谷は「風景の発見」と呼ぶのである。繰り返すが、柄谷のいう「風景の発見」とは、単なる「近代」的「風景」が初めて明治期に見出されたことのみを意味しているわけではない。筆者の解釈があまり的外れでないように思われるのは、柄谷自身が次のように述べているからである。

私が『風景の発見』というタームで書こうとしたのは、西洋においては長期にわたって、日本においてはほぼ明治二十年代に凝縮的に生じた、ある認識論的な布置のことであって、必ずしも狭義の風景のことをさしていない。しかも、『風景の発見』という事態は、ある構造的にからまりあった転倒であって、その“結節点”は歴史的に特定の時点として、明示されえないし、一つの角度やレベルにおいて解きほぐすわけにはいかないのである(柄谷：1984, 128)。

例えば、文学史家は、「文学史」という歴史を、古代から近代へと流れる文学の「進化・発展」のように記述する。ところが、それ自体がもう既に、『文学史』という遠近法に依拠しており、そのような「パースペクティブ」を可能たらしめている「認識論的布置の転倒」に気づかないのである。またこれは「文学史」ばかりでなく、「思想史」・「歴史学」などにもいえることであろう。

柄谷は、この「転倒」あるいは「配置を注視」し、その「起源」を探ろうとする(柄谷：1988, 206-207)。しかしながら、この「起源」探しも、従来の「文学史」のような、自らを問題の外側に置くような超越論的視点に立った歴史であってはならない。なぜなら、「認識論的布置の転倒」とは、その上に我々がのっている根本部分である以上、言及し得ないものなのだ。それはあたかも、ある「言語ゲーム」を記述しようとする際には、我々は、意識すらしないような「世界像」(Weltbild; picture of the world)というものに依拠していると考えた、ワイトゲンシュタインの議論に酷似し

ている。この点に関しては、次節で検討してみたい。

さて、「認識論的布置の転倒」という「事態」に関して、その歴史の変遷を、我々は追うことができないのならば、一体どのようにして、その「事態」を浮き上がらせればよいのか。「風景」というこの「布置の転倒」は、「いったんそれができあがるやいなや、その起源も隠蔽されてしまう」(柄谷:1988, 24)。そこで柄谷は、「認識論的布置の転倒」の「起源」を示すと思われる個々の言説の再検討を通じて、その「起源を明らかに」しようと試みたのである。それは、本稿では検討し得なかったが、従来の「文学史」で問題とされてきた「言文一致」や「告白」をめぐる言説であった。

5. 「風景の発見」とウィトゲンシュタインの「世界像」

前節では、内村鑑三の言説の位相を明らかにするための重要な手がかりを与えられると思われる、柄谷行人の「風景の発見」を取り上げ、その概要を述べてきた。その際、筆者には、柄谷の議論の背景が、ウィトゲンシュタイン (Wittgenstein, L.) の「言語ゲーム」¹⁶と「世界像」の考え方と、類似しているように思われた。本節ではこの点について検討してみたいと思う。

まず、ウィトゲンシュタインの「世界像」の考え方について概観してみたい。「世界像」について、ウィトゲンシュタインは次のように述べている¹⁷。

教科書、例えば地理の教科書に書かれていることを原則として私は信用する。何故かと問われれば、これらはすべて繰り返し確かめられてきた事実だから、と言うであろう。だが私はどうしてそのことを知るのか。どういう証拠があってそう言えるのか。私はひとつの世界像をもっている。それは真であるのか偽であるのか。とにかくその世界像が、私のあらゆる探究、すべての主張を支える基体なのである。そしてこれを記述する諸命題が、みな同等に検証の対象となるわけではない。(ウィトゲンシュタイン:1991訳, 47)

ウィトゲンシュタインのいう「世界像」とは、「私のあらゆる探究、すべての主張」、言い換えるならば個々の「言語ゲーム」を「支える基体」である。そして、この「世界像」は、ひとつひとつを取り上げて充分な「検証」を加えているわけではなく、暗黙かつ「自明」の「前提」として我々が依拠し、ある部分盲目的に信頼しているようなものである。

例えば、化学の燃焼実験を例に挙げて考えてみよう。ある人が、ある物質を燃焼させ、その過程を調べたとする。この実験の過程は、ひとつの「言語ゲーム」の「記述」に相当する。ところがその場合、実験者は、自分にピンセットをつまむ手があること、実験室内に空気があること、等々までも疑ってかかるようなことはしない。それらは、「自明の前提」として信じられているのである。それをも疑っていたのでは、実験そのものが成立し得ないといえよう。この「自明の前提」を、ウィトゲンシュタインは「世界像」と呼ぶ。

また別の例を挙げて考えてみたい。ある人が、何かの歴史上の事件を書こうとする。これは「言語ゲーム」の一つといえる。その際、この「言語ゲーム」を支える「世界像」は一体何であろうか。例えば、現代的手法で歴史的事実を記述する場合には、その当時本当に大地は存在していたかとか、空気は存在していたかとか、水や食べ物や他の人間はどうであったかとか、というようなことを我々は疑うことはないであろう。ましてや、「歴史」という時間軸を疑うことなどあり得ない¹⁸。

このように、当たり前のこととして通常は疑いもしない、意識すらしないようなことが「世界像」なのである。もちろん、「世界像」のすべてを書き尽くすことができないのは、いうまでもない。これについて、ウィトゲンシュタインは次のようにいう。

「個々の事実については私は疑うことができる。しかしこれらの事実をすべて疑うことはできない。」

それよりも、「全体を疑うことはしない」と言う方が正しいのではないか。

全体を疑うことはしないというのが、そもそわれわれが判断する仕方であり、したがってまた行為する仕方であるのだ。(ウィ

トゲンシュタイン：1991訳，61)

このように我々は、ある「世界像」を記述しようとする際に、別の「世界像」を前提とせざるを得ない。つまり、我々は、一挙に全体を見通すことができないという困難の中にいる。

これが示唆するのは「自己言及」によって生じるパラドックスの問題との類比性であろう。それは、例えば、

「この文は偽である。」

という文によって表されるようなものである。この言明が正しいものと仮定してみると、「この文は偽である」とする言明自体に反することになってしまう。一方、この言明が偽ならば、「この文は偽」ではなくなり、真であることになってしまう。このように、自己言及的な言明には、それ自体パラドックスに陥ってしまうものがあるのだ¹⁹。

我々が「言説」の歴史的な検討をする際にも、この問題は常につきまとしてこよう。つまり、客観的に第三者的な立場に立って、ある歴史的な事柄を解明することができないのである。我々は、前節で触れたように、既に幾重にも転倒した事態の中におり、我々が使用している言語自体もその転倒の中のもののなのだ。転倒した事態の中で研究を行うことの困難を考えてみなければならない。言い換えるならば、どのような研究上の立場をとろうとも、「風景という球体から出ること」は不可能なのである（柄谷：1988，41）。

このように見てくると、ウィトゲンシュタインの「世界像」の考え方が、柄谷に見出せることが分かる。柄谷は、全体というものが予想し得ないことを認識していたからこそ、言い換えるならば、「風景の発見」としか呼べぬ「事態」を、我々が今まさに基盤に据えていることに意識的だったからこそ、個々の徴候をすくい上げるような方法で、かの書物を記したのだといえよう。

ただし、柄谷が自覚的に試みたような、「『風景』そのものの起源（歴史性）を明るみに出すこと」（柄谷：1988，45）さえも、本当に成し得るのだろうか、という疑問も残る。我々は「風景の発見」と名付けられるような「事態」を脱し切ったといえるのか。もしいえるならば、それが何故

わかるのか。こうした疑問を柄谷の問題提起は逆説的に含んでいる。おそらく柄谷自身、理解していることであろうが。

6. 今後の展望

以上述べてきたように、「日本近代」の位相は、従来言われてきたような、西欧的な概念と伝統的な考えがただ絡まり合っている状態なのではなく、西欧において転倒した概念が「日本」に輸入された時に更なる転倒を引き起こし、その結果引き起こされた転倒がまた更なる転倒を引き起こすという、無限に波及する「事態」の中にある。そしてこれは、おそらく「文学」のみにいえることではない。「文学」が「認識論的転倒」の上で成立しているものならば、無論同時代の「言語空間」に位置する「地理学」も転倒の上に成り立っていることは、改めて言うまでもない²⁰。問題は『地人論』及び「地理学」の位相の一つを探るために、同時期に書かれた「テキスト」の間にあらわれるどのような徴候をすくいあげるか、ということであろう。

さて、これで「日本近代」における「地理」及び「地理学」の位相を検討するための問題設定が完了した。今後は「明治20年代」の言説内容を一つ一つ検討していく予定である。まず、明治27年という同時期に書かれた志賀重昂の『日本風景論』と『地人論』との比較が有効となるだろう。また、志賀重昂及び内村鑑三の著作の構造をはじめ、本稿で検討し得なかった「地理学」と「殖産」「政治」「宗教」との関わり、あるいはそれらの著作と進化論、ヘーゲル哲学との関わりなど、興味深いテーマは尽きない。ただし、内村鑑三だけをテキストとして分析していたのでは限界があることが、本稿において理解されたように思う。よって今後は、「明治20年代」の他のテキストの言説との比較検討において、「地理学」の位相を明らかにしていく予定である。見出すべきは、現在我々が自明なものとして考えている「地理」や「地理学」をめぐる言説にあらわれた徴候だといえよう。

（註記）旧漢字は、全て新漢字に改めた。

註

1) この論文の(佐藤:1996)には、いくつかの訂正がある。一つは、脚註5での Curry の議論の評価についてである。Curry の議論については、不適切な批評を行ったと現在は判断しているので、今後別稿で再検討するつもりである。また、Curry の文献が参考文献一覧から抜け落ちているので、ここに記しておく。Curry, Michael R. (1991): Postmodernism, Language, and the Strains of Modernism. *Annals of the Association of American Geographers*, 81(2), 210-228.

さらに、本文 p16の図2、ワイトゲンシュタインの独我論の図については、再検討の余地がある。以上、註記しておく。

2) 全ての分類項目は次の通りである。

「動物は次のごとく分けられる。(a)皇帝に属するもの、(b)香の匂いを放つもの、(c)飼いなされたもの、(d)乳呑み豚、(e)人魚、(f)お話に出てくるもの、(g)放し飼いの犬、(h)この分類自体に含まれているもの、(i)気違いのように騒ぐもの、(j)算えきれぬもの、(k)駱駝の毛のごく細の毛筆で描かれたもの、(l)その他、(m)いましがた壺をこわしたものの、(n)とおくから蝇のように見えるもの。」(フーコー:1993訳, 13)

3) 本稿で用いる「位相」とは、位相幾何学(topology)で使われている用語を、類比的に使用したものである。「地理」及び「地理学」という用語は、現在においても理解可能であるという点では「連続的」なものであるが、それが「明治20年代」においては異なった「言語空間」上の位置を占めているというような意味で用いている。

4) 内村鑑三の『地人論』に関する研究は、地理学のみならず、思想史、宗教学、文学など、様々な分野からの言及がなされている。例えば、地理学の分野においては、石田:1984、辻田:1977、源:1977、山名:1963などがある。これらは、『地人論』の内容紹介、内村の実人生と『地人論』との比較、書誌学的検討、ギョーとの比較などの研究である。このような研究視角には各々の意義があろうが、筆者の研究は「言説」研究であり、立場が異なっている。

5) ただし内村の思想的系譜として、石川三四郎の名を挙げることができるのではないだろうか。石川にも、ルクリュの翻訳であるが『地人論—大地と人類—』(昭和5年:1930年)という書物があり、それ

をもとに『古事記』研究や東洋文化史研究などを行っている。石川については、別稿で論じる予定である。

6) 福澤に関しては、1997年4月26日に行われた「地理思想の伝統と革新」研究グループ主宰の源昌久先生の研究発表(「福澤諭吉著『世界国尽』に関する一研究—原拠本調査を中心に—」)を参考にさせていただいた。

7) サーリンズ:1993訳を参照のこと。

8) 内村は「美術文学」と述べていながら、「美術」の方は検討していないように見える。内村が挙げているのは、今日の我々が「文学」の範疇に入れている人物である。よって、本稿ではとりあえず「美術」の方は検討せず、「文学」を主に取り上げることにした。内村の言説に表れる「美術」の位相も今後は考慮すべきであろう。

9) 内村は1884年に出された J. Sibree による英訳を利用して抜粋をノートに記している。それは次の通りである。

"Geography an essential and necessary basis of History. —Should not be rated too low or too high. —"The mild Ionic sky certainly contributed much to the charm of the Homeric poems, yet this alone can produce no Homers. Nor in fact does it continue to produce them; under Turkish government no bards have arisen," (内村:1984, 198)

10) 内村が「地理学と美術文学」の関係を論ずる上で挙げている名前は、次の通りである。ゲーテ、ミルトン、バーンズ、バイロン、シルレル(=シラー)、ウォルドオス(=ワーズワース)、ラマーチン(=ラマルティース)、イブセン、ビョルンソン。イブセンのみ劇作家として有名だが、その他の人物はほとんど皆「ロマン主義」の詩人である。

イブセンは、『人形の家』(1879年)以降散文形式の戯曲を書いているが、当初のものは韻文だった。つまり、内村が主に念頭に置いていたのは、イブセンの韻文形式の戯曲だった可能性も想定され得る。また、戯曲は最も古い文学形式であるため、直ちに内村がイブセンを「近代」的作家、すなわち「自然主義」の作家の典型と断定しているかどうかについては留保が必要であろう。

なお、「ロマン主義」「自然主義」については4節

以降で検討するが、行論上、ここで簡単に「ロマン主義」「自然主義」と「韻文」「散文」との関わりについて説明しておきたい。

通常、文学史において「ロマン主義」と「自然主義」は、次のように対立するものとして考えられている。一般的な理解では、「ロマン主義」の文学は、人間の倫理的向上と理想を追求するものであり、作者の感動をより深く伝える形式として韻文が選ばれていることが多かった。一方「自然主義」の文学は、「現実」、すなわち普通の生活をありのままに（写實的に）描き、伝説の英雄ではない普通の人間が本来持つ欠点さえもさらけ出そうとするのである。「自然主義」の文学に「散文」形式のものが多いの、このような意図に合うからであろう。

- 11) ところがこのように述べている一方で、蘇峰は、「文学者の主観的目的」として、「人を楽しむるにあらずして、人間社会に立ちて、真理と、善徳と、美妙とを一貫したる高尚なる博大なる真摯なる観念の観察者たり、説明者たるにありとせざるべからず（徳富：1894, 85）。」としている。これは、「ロマン主義」的な見方であり、先の主張とは一見異なるものである。これは、この時期の日本の文学状況を考える上で参考になる。以下本文で考察することになるが、おそらくこの時に、伝統的文学観と新しい文学観とが「日本」において衝突していたのである。蘇峰自身そのことを感じていたらしく、次のように述べている。すなわち、「今日文学者の社会に立つ位置は、未だ定まらざるものと謂ふべし」と。これはまた、内村が『地人論』で引用している、吉田松陰・林子平らに代表されるような伝統的「地理」の観念と、新しい「地理学」との関わりを論ずる上でも興味深い。
- 12) 線遠近法は、遠近法の一つの方法であるに過ぎない。レオナルド・ダヴィンチは、遠近法を「線遠近法」、「空気遠近法」、「消失遠近法」の三種類に分類しているという。線遠近法は具体的にはいかなるものかについて、あるいは遠近法の歴史についての詳細は、小山：1995を参照のこと。
- 13) 但し、大森のいう「密画化」と、フッサールがガリレイ及びデカルトが為したと見なしている「自然の数学化」とは、厳密には同じものではないが、行論上不都合を生じないので、一応同義と見なしておく（大森：1994）。
- 14) 柄谷の議論を敷衍すれば、実は西洋の文学史にお

けるこうした見方自体が転倒の上に成り立っている故、西洋の「ロマン主義」対「自然主義」という文学図式それ自体も再考すべきだということになる。

- 15) 無論これは「文学」のみにいえることではないだろう。「日本」の学問全体にかかわる事柄であるように思える。
- 16) <言語ゲーム>については、佐藤：1996を参照のこと。
- 17) ウイトゲンシュタインの哲学に関しては、成城大学の黒崎宏先生の解説に多くを負っている。特記して感謝申し上げたい。
- 18) というのは、歴史研究では、ユダヤ・キリスト教的な時間軸である西暦を、通常念頭に置いて記述を行っているからである。西暦をなくして、（実はこのような歴史観が入る以前の歴史感覚については、我々はもはや推測以外に言及する術がないのだが、）直線的な時間軸を用いずに、元号だけで歴史を構成することが可能であろうか。おそらく、そのような歴史は、今日とは全く違ったものとなるであろう。
- 19) このパラドックスを現代論理学がどのように解決してきたのかについては、内井：1992、中村秀吉：1992、野矢：1994、を参照。
- 20) 考えてみると、『地人論』の中で、「ロマン主義」の韻文の「基」として、「地理学」という「実証的」学問を据えること自体、転倒の徴候ではあるまいか。4節で見てきたように、柄谷は、「反ロマン的なものがロマン派の一部にはかならず、まさしくそのこと自体が「近代」の認識論的転倒であった、ということ」を述べている。柄谷はそれを示す事例として、詩人ワーズワースや哲学者ヘーゲルの名を挙げているのであるが、ワーズワースとヘーゲルは、まさしく内村が『地人論』の中で挙げている人物である。

<参考文献>

- 石田龍次郎（1984）：『日本における近代地理学の成立』、大明堂、310p.
- ウイトゲンシュタイン、L., 黒田亘訳（1991）：確実性の問題。『ウイトゲンシュタイン全集9』、大修館書店、1-169。（初版1975）
- 臼井吉見（1979）：『近代文学論争上』、筑摩叢書217、287。（初版1975）
- 内井惣七（1992）：『推理と分析』、放送大学教育振興会、117p.

- 内村鑑三 (1980) : 『地理学考』[のち『地人論』と改題]. 『内村鑑三全集 2』, 岩波書店, 352-480.
- 内村鑑三 (1981) : 『夏期演説 後世への最大遺物』. 『内村鑑三全集 4』, 岩波書店, 249-294.
- 内村鑑三 (1984) : “Earth and Man” (初期ノート). 『内村鑑三全集 40』, 岩波書店, 183-242.
- 大森荘蔵 (1994) : 『知の構築とその呪縛』, ちくま学芸文庫, 252p.
- 小田清治 (1977) : 内村鑑三の「地人論」について. 季刊日本思想史, 3, 117-134.
- 柄谷行人 (1984) : 『隠喩としての建築』, 講談社, 294p. (初版1983)
- 柄谷行人 (1988) : 『日本近代文学の起源』, 講談社文芸文庫, 270p.
- 神吉敬三 (1995) : 遠近法への反逆と挑戦—ピカソの目をめぐって—. 佐藤忠良・中村雄二郎・小山清男・若桑みどり・中原佑介・神吉敬三 : 『遠近法 of 精神史』, 平凡社, 273-324. (初版1992)
- 小阪修平 (1990) : 『イラスト西洋哲学史』, JICC 出版局, 303p. (初版1984)
- 小山清男 (1995) : 遠近法の成立 図法の原理と絵画空間. 佐藤忠良・中村雄二郎・小山清男・若桑みどり・中原佑介・神吉敬三 : 『遠近法 of 精神史』, 平凡社, 97-148. (初版1992)
- サーリンズ, M., 山本真鳥訳 (1993) : 『歴史の島々』, 法政大学出版局, 263+38p.
- 坂本多加雄 (1996) : 『20世紀の日本11 知識人 大正・昭和精神史断章』, 読売新聞社, 380p.
- 佐藤由美子 (1996) : 地理学再検討のための視座—ウィトゲンシュタイン・<言語ゲーム>論をめぐって—. お茶の水地理, 37, 11-26.
- 志賀重昂 (1979) : 日本風景論. 松本三之介編 : 『明治文学全集37 政教社文学集』, 3-97.
- 辻田右左男 (1977) : 地人論の系譜—A. Guyot と内村鑑三—. 奈良大学紀要, 6, 28-42.
- デカルト, R., 桂寿一訳 (1967) : 『哲学原理』, 岩波文庫, 180p. (初版1964)
- 徳富蘇峰 (1894) : 『文学断片』, 民友社, 285p.
- 中村秀吉 (1992) : 『パラドックス—論理分析への招待—』, 中公新書, 214p. (初版1972)
- 中村光夫 (1985) : 『明治文学史』, 筑摩書房, 267p. (初版1963)
- 中村光夫 (1991) : 『日本の近代小説』, 岩波新書, 235+6 p. (初版1954)
- 中村雄二郎 (1995) : ルネサンスと人間の目の誕生—等身大空間の発見. 佐藤忠良・中村雄二郎・小山清男・若桑みどり・中原佑介・神吉敬三 : 『遠近法 of 精神史』, 平凡社, 51-95. (初版1992)
- 野矢茂樹 (1994) : 『論理学 Logic: An Introduction』, 東京大学出版会, 261p.
- 南原繁 (1985) : 『政治理論史』, 東京大学出版会, 449+9 p. (初版1962)
- 橋爪大三郎 (1989) : 『はじめての構造主義』, 講談社現代新書, 232p. (初版1988)
- 長谷川泉 (1961) : 『近代日本文学思潮史』, 至文堂, 231p.
- フーコー, M., 渡辺一民・佐々木明訳 (1993) : 『言葉と物—人文科学の考古学—』, 新潮社, 413+61p. (初版1974)
- ヘーゲル, K., 武市健人訳 (1968) : 『ヘーゲル全集10 改訂歴史哲学 上巻』, 岩波書店, 335p. (初版1954)
- 福澤諭吉 (1959) : 『世界国尽』. 『福澤諭吉全集第2巻』, 岩波書店, 579-668.
- フッサール, E., 細谷恒夫・木田元訳 (1995) : 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』, 中公文庫, 553p.
- 正宗白鳥 (1969) : 内村鑑三—如何に生くべきか—. 『日本現代文学全集30 正宗白鳥集』, 講談社, 347-390.
- 源昌久 (1977) : 内村鑑三の地理学—書誌学的調査1—. 淑徳大学紀要, 11, 56-78.
- 柳田国男 (1968a) : 雪国の春. 『定本柳田国男集第二巻』, 筑摩書房, 5-17.
- 柳田国男 (1968b) : 旅人の為に—千葉県観光協会講演—. 『定本柳田国男集第二巻』, 筑摩書房, 417-430.
- 山名伸作 (1963) : 『地人論』と地理学. 香川大学経済論集, 36(2), 39-53.
- ルクリュ, E., 石川三四郎訳 (1978) : 『石川三四郎選集第六巻 地人論 (大地と人類)』, 黒色戦線社, 334+12p.
- レヴィ=ストロース, C., 大橋保夫訳 (1989) : 『野生の思考』, みすず書房, 366+30p. (初版1976)
- 若桑みどり (1995) : ルネサンスの空間の崩壊—マニエリスムとバロックへの道. 佐藤忠良・中村雄二郎・小山清男・若桑みどり・中原佑介・神吉敬三 : 『遠近法 of 精神史』, 平凡社, 149-222. (初版1992)
- 和辻哲郎 (1962) : 『風土』. 『和辻哲郎全集 第八巻』, 岩波書店, 1-256.